

共同研究プロジェクト紹介 独創・発展型：接触方言学による「言語変容類型論」の構築 言語変容の類型化に向けて

著者	朝日 祥之
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	4
号	1
ページ	10-17
発行年	2013-06
URL	http://doi.org/10.15084/00000726

言語変容の類型化に向けて

Towards a Sociolinguistic Typology

朝日 祥之 (ASAHI Yoshiyuki)

1. はじめに

本稿では、著者が2009年10月から2012年9月末にかけて行った共同研究プロジェクト「接触方言学による『言語変容類型論』の構築」で進められた調査研究によって明らかにされたことを報告する。

以下、2節で本プロジェクトの研究目的と研究計画を提示し、その計画によって企画実施された調査とその狙いを述べる。3節でその調査結果の一部を紹介する。4節で「言語変容類型論」構築に向けた試みと評価を行う。5節で本研究テーマにおける今後の展望を行う。

2. 本プロジェクトの目的と研究計画

最初に本プロジェクトの発足当初の研究目的と研究計画を示す。それによってどのような調査が企画・実施されたのかについて、説明を試みる。

2.1 研究目的

本プロジェクトの目的は、国内外に形成された社会の地域特性と言語変容との関係性の類型化を試みることにある。日本語社会には大都市や地方都市、町村部、島嶼部をはじめとして、ニュータウンやプランテーションによって形成された社会、移民政策、ならびに植民地政策によって形成された海外の日本語コミュニティなどが存在する。それぞれの社会には他にはない特徴が備わっている。本プロジェクトでは、その特徴を「地域特性」とし、それと言語変容との関係を明らかにすることを目指した。

従来の研究では、「全国共通語化（または標準語化）」という名称で言語変化が扱われることがほとんどであった。そこでは、いわゆる「取り替え」（徳川1978）と扱われる言語事象が主要だった。もちろん、そこで得られた知見は少なくない。一方で、その研究だけでは、「全国共通語化」という現象をとりまく社会言語学的、または社会学的な要因も考察の対象としたとは必ずしも言えない。

本プロジェクトが目指す研究は、1990年代から Peter Trudgill 氏を中心とした調査研究に確認することができる (Trudgill 1996, 1997, 2003, etc.)。2011年に Trudgill 氏によって *Sociolinguistic typology* が刊行された。そこでは、コミュニティのサイズ、ネットワーク構造、共有情

報量などの要因と言語構造の特徴との相関を探るアプローチが採用されている。本プロジェクトを進める上で、このアプローチを出発点とすることにした。

2.2 研究計画・研究態勢・企画された調査

本プロジェクトは、七つの班（総括班、ニュータウン班、北海道班、地方都市班、ハワイ班、孤立社会班、理論構築班）を設定し、それぞれの班で必要とされる調査研究を進めた。以下に、その概要を示しておく。

(1) 既存調査の経年調査を札幌市、釧路市で実施した

これによる調査は (a) 大規模経年調査、(b) 特定地点の調査（山鼻地区）に分けられる

(a) 大規模経年調査

国立国語研究所が1986年に札幌市で実施した調査票、北海道方言研究会が1989年に釧路市で実施した調査票を基盤とした調査を設計した。2011年、2012年に札幌市、釧路市でトレンド調査を調査会社に委託して実施し、合計412人から回答を得た。

(b) 特定地点調査（山鼻地区）

小野米一氏によって1990年に実施された調査票をもとに、必要項目の選定を行った上で、2010年から調査を行い、合計17人から回答を得た。

(2) 既存調査データ（国語研・岡崎調査）を活用した分析を行った

国立国語研究所で1953年、1972年、2008年に実施されてきた愛知県岡崎市における敬語と敬語意識調査の調査データの一部（「道教え」調査項目）を活用し、空間参照枠に関する分析を行うためのデータの整備を行った。岡崎市での特徴を位置づけるために、札幌市、埼玉県入間市、名古屋市、福岡市で看板表示に見る空間参照枠調査を2011年に実施した。

(3) これまで十分に調査されてこなかった言語事象（音調変異、変異認知）を捉える調査を設計し、実施した。調査データの分析を行った

音調レベルの変異の一つとされる prosodic subordination に着目した調査を設計した。札幌市、首都圏、福岡市、鹿児島市をフィールドとし、各地点20人（男女各10人）を対象にした調査を行った。

(4) 文献で取り上げられた地域社会（奈良田、秋山郷）で指摘された言語事象に関する考察を行った

両地域の方言に関する記述を行った文献、データベースなどにアクセスをし、記述内容の整理を行った。

(5) 既存する音声資料データを活用した分析を行った

1970年以降に世界各地で収集されているオーラルヒストリーの録音調査がある。その中でも、ハワイ大学で収集された音声資料、ならびに北海道上富良野町で収集された音声資料を活用した分析を行った。

- (6) 類似した特性を持つ地域社会で観察される言語事象の比較・対照を行った
海外の日系コミュニティのいくつか（ハワイ、ブラジル）を取り上げ、既存する日本語談話資料を活用した分析を行った。また、ニュータウンについては、イギリスと日本のニュータウンで観察される言語事象に関する比較、対照を行った。
- (7) 「言語変容類型論」を構築する枠組みの策定を行った
プロジェクト発足当時の構想を基盤とし、Peter Trudgill, Paul Kerswill をはじめとする当該分野の研究者との話し合いを継続的に実施した。

3. 調査結果の紹介

本節では、前節で実施した調査の一部を紹介する。ここでは、(1) 北海道札幌市と釧路市で実施された実時間調査、及び(2) 愛知県岡崎市で実施された敬語と敬語意識調査に見られる「道教え場面」調査と空間参照枠に関する調査を取り上げる。

3.1 北海道札幌市・釧路市で実施された実時間調査

2.2 節で(1)の(a)で取り上げた大規模経年調査のことである。この調査では、語彙・文法・音声音韻・アクセント・場面差調査・言語意識に関する項目が設定された。ここでは語彙項目を取り上げることにしたい。具体的には「シバレル」と共通語形である「サムイ」の使用を取り上げる。それぞれの調査結果を図1と図2に示す。いずれの図も、札幌市・釧路市で1980年代に実施された結果と今回実施した調査結果を回答者の生年順に並べて示してある。

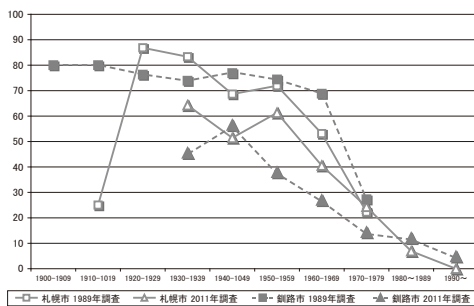


図1 「シバレル」の使用率

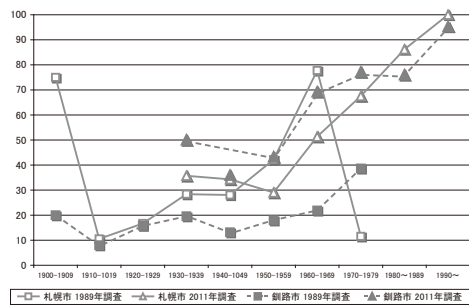


図2 「サムイ」の使用率

図1と図2から「シバレル」が「サムイ」に置き換わる様子が読み取れる。ここで注目すべきはその過程である。ただ単に置き換わるのではなく、その過程は札幌市と釧路市では異なるのである。これを生み出した要因として考えられるのは、もちろん標準語化も挙げられるが、北海道居住者の間では(1)居住環境の変化(家の中が暖かくなった。)と(2)「シバレル」ことが少なくなったという報告が多い。ちなみに、両都市の過去50年間の最低気温の変化を追ってみた(図3)。

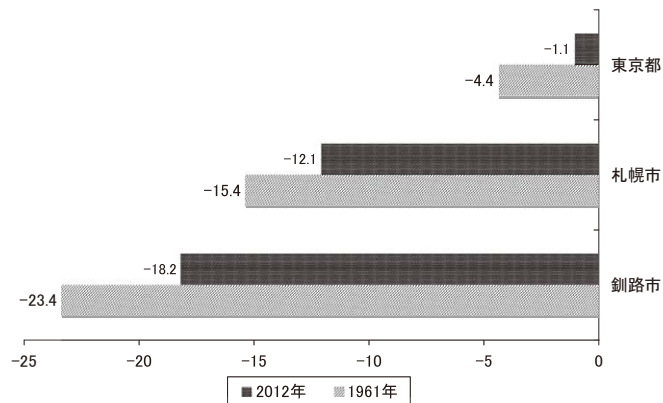


図3 札幌市、釧路市における1961年と2012年の最低気温

図3からも見て取れるように、過去50年間でもっとも寒かった日の気温にも変化がある。両都市での50年間での気温差に差異が認められる。中でも釧路市の最低気温の変化は札幌市と東京都と比べると大きい。釧路市における「シバレル」の使用率が札幌市よりも急激に低くなったことは、この気温差と関係があるように思われる。

3.2 愛知県岡崎市での敬語と敬語意識調査での「道教え場面」調査と空間参照枠調査

次に紹介する調査は、国立国語研究所によって1953年、1972年、2008年に愛知県岡崎市で実施された敬語と敬語意識調査で質問項目として用意された「道教え場面」の調査データを用いた分析結果と、いわゆる Levinson (1996, 2003) による空間参照枠 (frame of reference) である。これは2.2節で示したものの(2)に該当する。

「道教え場面調査」とは、次に挙げる調査質問文のことである。

Q1 わたしのような旅行で来た者が、東岡崎駅で、明代橋(みょうだいばし)はどちらかということあなたにたずねました。何と言って教えますか。

本稿ではこの回答形式の中で、ダイクシス表現の使用を、3回の調査データから分析を試みた Kataoka (2012) を紹介する。ここではダイクシス表現の使用率をまとめた結果を図4(次ページ)に示した。

図4から、3回の調査で回答形式にダイクシスの使用率が下がったことがわかる。これは、質問者(旅行者)と回答者(被調査者)との間の情報の共有量 (amount of shared information) (Trudgill 2011) が少なくなったため、つまり、都市化が進み、近所に住む人たちの関係が疎遠になったためと考えられる。その変化がダイクシスの使用率に影響を与えたのであろう。

次に、空間参照枠についてである。Levinson (1996, 2003) によれば、座標を用いた空間指示には、指示対象 (referent)、指示基点 (relatum)、視点 (perspective) の3要素が必要であり、これら結びつけるものとして3種類の空間参照枠 (frame of reference) が想定されている。

(1) 絶対参照枠：磁場・地理環境・重力などに依拠する不変の空間設定

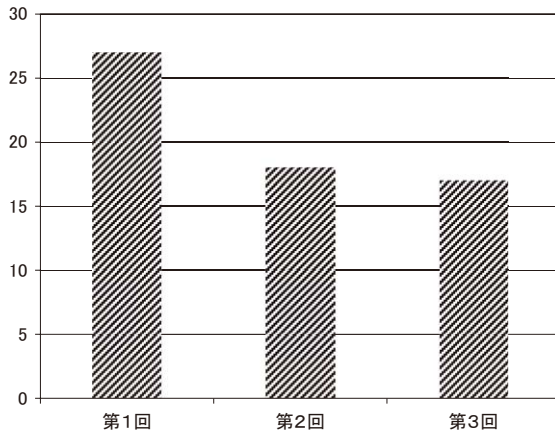


図4 「道教え場面」におけるダイクシスの使用率

(2) 相対参照枠：観察者の視点を認識の基点とする空間設定

(3) 内在参照枠：車などの事物に固有の方向性にもとづく空間設定

この枠組みを用い、道案内看板に見られる「空間参照枠に依拠する表現」を、国内4地点（札幌、入間、名古屋、福岡）を例に考察を試みた（朝日・片岡 2011）。その結果が図5である。

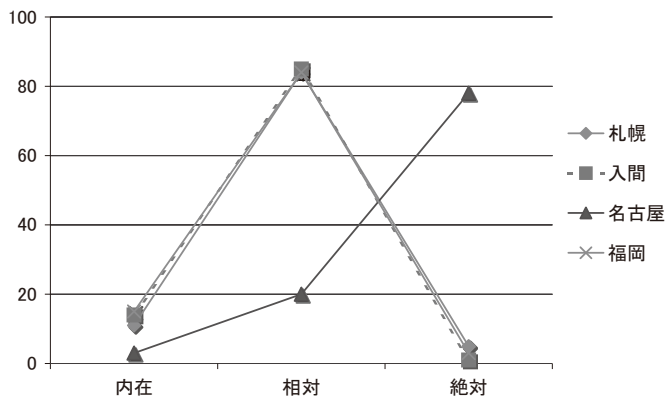


図5 空間参照枠から見た4地点比較

図5からもわかるように、名古屋以外の3地点では「相対参照枠」の使用が圧倒的に多い。3地点で使われたそれぞれの参照枠の使用もほぼ同じである。

一方、絶対参照枠の使用については「西高東低」と言われることもあるが、図5からは必ずしもそうではないことがわかった。というものの、名古屋だけは、絶対参照枠の使用が多い。もちろん、まとまった規模の調査は実施していないが、大阪や神戸ではこの絶対参照枠の使用が目につく。更なる調査が必要である。

4. 「言語変容類型論」の構築に向けた試みと評価

本節では、本プロジェクトの中心的課題である「言語変容類型論」の構築に向けて、調査で得られた結果を踏まえた試みを紹介する。具体的には Trudgill (2011) の枠組みの有用性の検証を行いながら、類型化を試みることにした。表1は Trudgill の枠組みをもとに、本プロジェクトで設定した枠組みを使い言語変容の類型化を試みたものである。

本プロジェクトで実施した調査から、五つの地域社会（鶴岡市、西神ニュータウン、^{はげたに}榎谷町、サハリン、秋山郷）を取り上げたものである。この五つの地域社会においても、多くの場合、調査した結果がこの枠組みに当てはまることを確認した。例えば、ニュータウンや札幌市、釧路市、岡崎市での調査結果から、その裏付けをとることができた。

その一方で、ネットワーク構造、共有される情報量など、他の変数も取り込む必要があることを明らかにした。その他の変数として考えられるのは、(a) 出身地構成、(b) 内心性／外心性 (endocentric/exocentric)、(c) 地域社会の保守性、(d) コミュニティの規模である。(a) は話者変数の一つであるが、本プロジェクトで実施した調査結果から、例えばハワイ方言に多くの広島弁の特徴、北海道方言に東北弁の特徴が多く観察されることが指摘された。(b) と (c) は地域社会の人口動態と保守性の程度との相関で言語変容の類型を図る可能性が考えられる。(d) も枠組みとして取り込むことがプロジェクトを進行させる上で必要であることを確認した。

表1 言語変容の類型化の試み

	言語変化の方向性	方言接触の度合い	コミュニティのタイプ	ネットワーク構造	共有情報量
鶴岡市	単純化	高	地方都市	弱い	少ない
西神ニュータウン	単純化	高	計画都市	弱い	少ない
榎谷町	単純化	高	農村社会	強い	多い
サハリン	複雑化	低	農村社会	弱い	少ない
秋山郷	複雑化	低	農村社会	強い	多い

本プロジェクトでも Trudgill の枠組みに従い、言語変容の方向性の吟味を行った。まず、単純化 (simplification) は、共通語化に代表される地域方言と全国共通語の接触現象をはじめとして、本プロジェクトで取り上げたフィールドのほとんどで確認された。その一方、複雑化 (complexification) については吟味が必要になった。基本的にこの現象は、語彙／文法／音声・音韻などの体系に新たなカテゴリーが追加されることを指す。しかしながら、この定義について、より慎重な検討が必要だという指摘もなされているように、本プロジェクトにおいてもその定義について検討を行った。

5. おわりに：当該研究分野の展望

本プロジェクトで設定した「言語変容類型論 Sociolinguistic Typology」は、その研究の必要

性は主張されてきたものの、それが本格化したのは、世界的に見ても、この2、3年である。その意味で、その方法論、類型化の仕方について、試行的である部分が多い。実際、国際会議等のワークショップなどで検討が着手されたばかりである。まさに「独創的」な研究領域であろう。

言語変容の仕方と地域特性との関係については、その必要性は広く認識されている。言語類型論においても同様のことは言える（Tsunoda 2006 など）が、本格的にその関係を論じたものはほとんどない。その意味でも、当該研究分野の研究が今後も継続的に進められ、より本格的な類型化が進められることを期待したい。

●参考文献●

- 朝日祥之・片岡邦好(2011)「『空間参照枠表現』の地域較差と指向性について」『第27回社会言語科学会研究大会論文集』152-155.
- Kataoka, Kuniyoshi(2012) Synchronic and diachronic variation of spatial “frames of reference” (FOR) in Japanese way finding discourse. A paper read at a project meeting, ‘Contact dialectology and sociolinguistic typology,’ NINJAL.
- Levinson, Stephen(1996) Frames of reference and Molyneux’s question: Crosslinguistic evidence. In: Paul Bloom, Mary Peterson, Lynn Nadel, and Merrill Garrett (eds.) *Language and space*, 109-169. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levinson, Stephen C.(2003) *Space in language and cognition: Explorations in cognitive diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 徳川宗賢(1978)「単語の生と死—方言接触の場合—」『国語学』105: 40-46.
- Trudgill, Peter(1996) Dialect typology: Isolation, social network and phonological structure. In: Gregory R. Guy, Crawford Feagin, Deborah Schiffrin, and John Baugh (eds.) *Towards a social science of language: Papers in honor of William Labov* (Vols. 1-2, Vol. 1), 3-21. Amsterdam: John Benjamins.
- Trudgill, Peter(1997) Typology and sociolinguistics: Linguistic structure, social structure and explanatory comparative dialectology. *Folia Linguistica* 31(3/4): 349-360.
- Trudgill, Peter(2003) Linguistic and social typology. In: Jack K. Chambers, Peter Trudgill, Natalie Schilling-Estes (eds.) *Handbook of language variation and change*, 707-728. Oxford: Blackwell.
- Trudgill, Peter(2011) *Sociolinguistic typology*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Tsunoda, Tasaku(2006) *Language endangerment and language revitalization: An introduction*. Berlin: Mouton de Gruyter.

《要旨》 本稿では、独創・発展型共同研究プロジェクト「接触方言学による『言語変容類型論』の構築」で企画・実施された調査研究の成果を紹介した。最初に、研究目的と実施された調査の設計を述べた。その後、研究期間中に実施された様々な調査のうち、北海道札幌市と釧路市で実施された実時間調査と愛知県岡崎市で実施された敬語と敬語意識調査で取り扱われた「道教え」場面調査の調査結果、ならびに国内4地点における空間参照枠に関する調査結果を取り上げた。また「言語変容類型論」構築の試案を提示し、その提示の方法、試案の有用性、反省点、今後の当該分野に関する展望を行った。

Abstract: This paper reports the outcomes of my project, ‘Contact Dialectology and Sociolinguistic Typology.’ After a brief description of my research goal and survey designs, I explain the results of two surveys. In the first, a quantitative real-time survey in Sapporo and Kushiro, I investigated the use of *sibareru* (‘freezing’) and the corresponding Tokyo Japanese form *samui*. In the second, I focused on the discourse of giving directions, with a close look at the use of deixis and spatial frame of reference. Based on the results, I propose a tentative framework for sociolinguistic typology and offer an assessment of it. Lastly, I consider future prospects for this research topic.

朝日 祥之 (あさひ・よしゆき)

国立国語研究所時空間変異研究系准教授。博士（文学）（大阪大学）。国立国語研究所情報資料部門研究員，研究開発部門研究員を経て，2009年10月より現職。

主な著書・論文：『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』（ひつじ書房，2008），『改訂版社会言語学図集』（共編，秋山書店，2010），『サハリンに生まれた日本語の接触方言』（『日本語学』29(6)，2010），『敬語研究と実時間的言語変化研究との接点を求めて』（共著，『社会言語科学』11(1)，2008）。

受賞：第9回徳川宗賢賞（優秀賞）（社会言語科学会，2010）。

社会活動：International Conference on Methods in Dialectology Steering Committee, ISDG (International Society for Dialectologists and Geolinguists) Scientific Committee, Foundation for Endangered Languages Executive Committee, NWA-V-AP (New Ways of Analyzing Linguistic Variation and Change in the Asia-Pacific Region) Steering Committee, 変異理論研究会世話人。

独創・発展型共同研究プロジェクト「接触方言学による「言語変容類型論」の構築」

プロジェクトリーダー 朝日祥之

（国立国語研究所 時空間変異研究系 准教授）

プロジェクトの概要

本プロジェクトは，様々な特性を持つ地域社会で生じている言語変容の類型化を，文献調査，実時間調査の手法を用いて行うことを目的とする。2011年に刊行された Peter Trudgill の *Sociolinguistic typology* (Edinburgh University Press) をその類型化の手がかりとし，日本国内外で形成された地域社会（地方都市，ニュータウン，移民社会）をフィールドとした調査研究を実施する。類型化を行う上で Peter Trudgill をはじめとする関連領域の研究者にもプロジェクトに参画してもらい，検討を行う。